KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭&SIGMAプレゼンツ

Kikuji Kawada
川田喜久治
Endless Map – Invisible

From the series *The Last Cosmology* © Kikuji Kawada, Courtesy PGI

アルル国際写真祭の「アルル・アソシエ（Arles Associé）」として展覧会を開催

共同プロデュース：
KYOTOGRAPHIE × SIGMA

キュレーター：
高橋 朗
PGI

アートディレクション：
ルシール・レイボーズ
仲西祐介
KYOTOGRAPHIE 共同ディレクター

セノグラフィー：
小西啓睦
空間デザイン

ハタノワタル
和紙職人

会場：
VAGUE（アルル）
14 Rue de Grille, 13200 Arles, France

展覧会会期：
2025年7月7日–10月3日

KYOTO GRAPHIE international photography festival

SIGMA

ARLES ASSOCIÉ 2025 LES RENCONTRES DE LA PHOTOGRAPHIE

展覧会について

「写すとき、私は“いま・ここ”以外の何ものも見ていません。それが紙に定着し、あるいは電波に乗って世界を走るとき、いつしか遠く昔の記憶となり、光や影のように、彼方をほのめかすような衝撃をもたらすことがあります。日々の視線こそが写真のスタートなのです。」
川田喜久治（2025）

「Endless Map – Invisible」は、写真家・川田喜久治のフランスにおける初の大規模個展です。川田氏はVIVOの共同創設者であり、戦後日本の芸術写真を代表する写真家です。
本展は、川田所属の東京のギャラリーPGIの高橋 朗氏をキュレーターに迎え、2024年のKYOTOGRAPHIE京都国際写真祭での展示をさらに発展させた内容となっています。

広島・長崎への原爆投下から80年の節目となる今年、「Endless Map – Invisible」では、川田のデビュー作から最新作まで代表的な4つのシリーズが一堂に会します。写真家の妥協なきまなざしを通して、戦後80年にわたる日本の歴史をたどり、そこでは時間と記憶の層が交錯し、世界の劇場が立ち上がるのです。

『地図』（1959–1965）および『Endless Map』（2021）：
書物そのものが一つのオブジェともいえる作品〈地図〉は、のちに〈Endless Map〉として再構築され、日本の敗戦によるトラウマを力強く証言するものとして制作されました。この作品は、当時主流だったドキュメンタリー写真の枠を超え、写真表現におけるストーリーテリングのあり方において大きな転換点を示しました。

『ラスト・コスモロジー』（1995）：
昭和からミレニアムへと移り変わる時代を詩的に見つめるこのシリーズでは、川田の宇宙への憧憬が浮き彫りとなり、天空が運命や災厄の舞台として描かれています。

『Los Caprichos』（1972年～現在）：
フランシスコ・デ・ゴヤの「気まぐれ」を意味する同名作品に着想を得て始まったこのシリーズは、近年になって川田自身が再び取り上げるようになりました。日本の高度経済成長期を鋭く見つめ直す作品群です。

『Vortex』（2022）：
抽象とめまいへの探求をさらに深めた〈Vortex〉は、内面的な崩壊や宇宙的な追究のかたちを表現しています。川田は断片、揺らぎ、痕跡の美学をさらに発展させ、写真を不安定な世界に対峙する思考の道具として提示しています。

これらは夢想によって形作られたイメージの集まりです。もともとは一つのまとまりを成すつもりはなかったのですが、イメージが重なり合ううちに、写真ならではの隠喩が生まれていったのかもしれません。
川田喜久治（2025）

「Endless Map – Invisible」で紹介される4つのシリーズを通じて、川田喜久治は深く詩的でありながらも強い意志を感じさせる世界観を提示しています。

『地図』と『Endless Map』

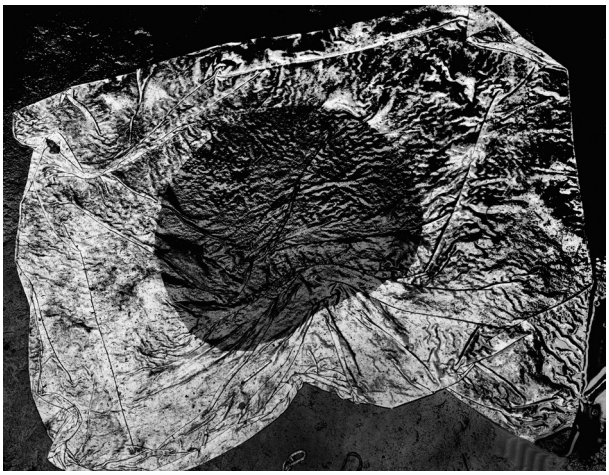
1965年に出版された〈地図〉は、写真の歴史に衝撃を与え、最も偉大な傑作のひとつとして広く認識されています。この作品は、広島・長崎の原爆投下による集団的トラウマと、戦後20年にわたる復興の歩みを視覚的に省察したものです。暗く質感のある、しばしば抽象的なイメージの連なりの中には、原爆ドームの廃墟（原爆投下地点近くで唯一残った建造物）が登場し、経済成長を象徴するものや、より主観的かつ内省的なビジョンと混ざり合いながら描かれています。

この作品は、政治的メタファーと日本の戦後の記憶をめぐるストーリーテリングの実験に満ちており、総合芸術作品として構想されました。写真・グラフィックデザイン・詩的な語りを、非線形かつラディカルなかたちで融合させることによって、写真集という形式を根本から再定義したのです。デザイナー・杉浦康平との協働により、川田は写真集を単なるイメージの器ではなく、タイポグラフィや構成、レイアウトなどすべての要素が関わる「感覚的な建築」へと昇華させました。その結果、読者は密度が高く、断片的で、まるで迷路をさまようような読書体験を味わうことになります。

マーティン・パーが「日本写真集の聖杯」と評したように、〈地図〉は、形式と内容が不可分な自律的な作品としての写真集のモデルとなり、その大胆な形式と喚起力は、次世代に大きな影響を与えました。ロバート・フランクやウィリアム・クラインの出版物と並び、写真出版史における重要な参照点であり続けています。写真の表現力と主観性の可能性、そして現実を表現する手段としての暗示の力を探究した本作は、当時主流だったドキュメンタリー写真からの決定的な逸脱を示しました。

常に新たな視点で、過去の作品と向き合い続けてきた川田は、パンデミック中に『地図』に再び取り組みました。新たな技術やメディアによる実験から生まれたこれらの作品は〈Endless Map（終わりなき地図）〉としてまとめられ、今回アルルのVAGUEにて、オリジナルプリントとともに展示されます。

『地図』



Kikuji Kawada *Japanese National Flag*, 1959 – 1965 From the series *The Map*
© Kikuji Kawada, Courtesy PGI

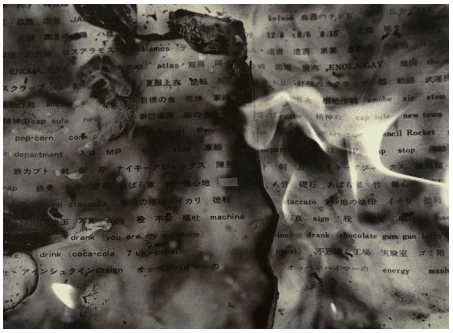
2021年、PGIでの何度目かの「地図」展に向けてネガをデジタル化したことをきっかけに、プリント制作も暗室から明室へと移行しました。科学や時代の変化の中で、日々の光そのものの違いをふと感じたのです。写されたものの見え方も、時の流れとともに変わっていきます。そうした変化を受け止めるかのように、タイトルも見直す必要があると感じました。〈地図〉は〈Endless Map〉となり、終わりのない地図として持続することで、見る側の見え方にも新たな変化が生まれていきます。こうした開かれた感覚が、新たなセレクションや媒体への再試行、そして目に見えるものだけでは伝えきれない抽象的な視点を導いてくれるのです。

川田喜久治（2025）

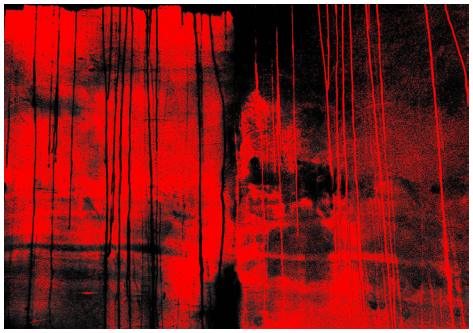
1 川田喜久治 《Words Burning Up》, 1960 – 1965年
〈Endless Map〉シリーズより © Kikuji Kawada, Courtesy PGI

2 川田喜久治 〈The Map / Visions of the Invisible〉シリーズより
© Kikuji Kawada, Courtesy PGI

3 川田喜久治 《太田川、原爆ドーム》1959 – 1965年
〈Endless Map〉シリーズより © Kikuji Kawada, Courtesy PGI



1



2

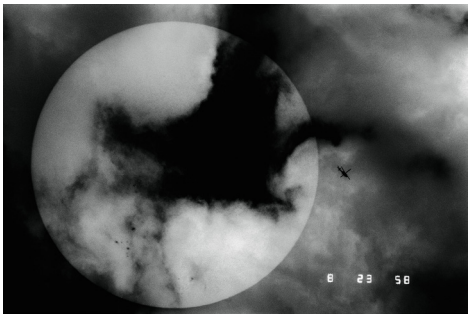
3

『Endless Map』

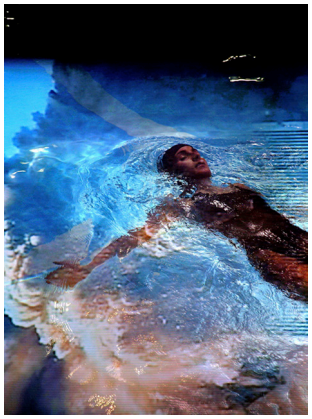
『ラスト・コスモロジー』

昭和時代からミレニアムの終わりにかけての日本の移行期にあたる数十年間、川田は歴史と不可視なもの、過去の痕跡と宇宙の神秘との間にある、緊張感をはらんだ独自の作品群を追求しました。〈ラスト・コスモロジー〉(1995)シリーズは、天空を運命や災厄の舞台として探求しています。おもに1980年代から1990年代に制作されたこれらの写真は、日蝕や雲、神秘的な大気現象を、冷戦の不安や現代日本の社会的変動に取り憑かれた移行期の世界を象徴するメタファーとして提示しています。川田は、科学と予兆のあわいにある薄暗く幻想的な写真表現を展開しています。

1 川田喜久治 《ヘリオスポットとヘリコプター》東京、1990年
〈The Last Cosmology〉シリーズより © Kikuji Kawada, Courtesy PGI
2 川田喜久治 《2013年9月11日》東京、1990年
〈The Last Cosmology〉シリーズより © Kikuji Kawada, Courtesy PGI
3 川田喜久治
〈The Last Cosmology〉シリーズより © Kikuji Kawada, Courtesy PGI



1



2

3

『Los Caprichos』

〈Los Caprichos(気まぐれ)〉は、スペインの画家フランシスコ・デ・ゴヤの同名の版画シリーズに着想を得た作品です。日本の高度経済成長期に生まれたこの写真シリーズでは、迷路のような構造物や回廊、格子、象徴的な監獄といったイメージを通して、閉塞感や精神の内面構造を探っています。そこには、目に見えるものが不安と記憶の幾何学に溶け込んでいくような空間が広がっています。このシリーズの核にあるのは、直接的な描写ではなく、対比や視覚的リズム、示唆を通じて語る手法です。〈Los Caprichos〉は1972年に『カメラ毎日』誌で初めて発表され、1986年にはPGIギャラリーで展示されました。1998年には『Théâtre du monde(世界劇場)』という書籍に〈Los Caprichos〉が〈ラスト・コスモロジー〉や〈カー・マニアック〉とともに収録されました。その後も独立した作品としての形を整えていきました。本展では、作家自身によって再考されたこのシリーズを、時間的な広がりとともに提示します。

〈Los Caprichos〉は雑誌掲載を目的にしたと思われがちですが、決してそうではありません。長く掲載してくれる雑誌など存在しないのです。やはり、イメージを収める「箱」が必要ですし、それらを包括するタイトルも、作品を持続させるためには重要な役割を果たします。この箱は、私にとって「世界という舞台」となり、拡張し続ける地図のような、心の気まぐれでもありました。もし今、この作品に新たな名前をつけるとすれば、〈Endress Map〉、〈Unfinished〉、〈Continue〉——そんな、終わりのないシリーズと呼ぶでしょう。

川田喜久治(2025)

1–2 川田喜久治 〈Los Caprichos〉シリーズより © Kikuji Kawada, Courtesy PGI
3 川田喜久治 〈Los Caprichos, Invisible〉シリーズより © Kikuji Kawada, Courtesy PGI

1

2

3

『Vortex』

2022年に書籍として出版され、2024年のKYOTOGRAPHIEで映像インスタレーションとして発表された〈Vortex〉は、川田が自身のInstagramアカウントで定期的に発表している膨大な作品群から抽出されたイメージによって構成されたものです。これらの写真で川田は、〈地図〉以来一貫して取り組んできた抽象性と都市の混沌によるめまいへの探求をさらに深めており、時代に対する鋭くも繊細な視線が表れています。渦巻きや回転する物質のイメージは、内面的な崩壊と宇宙的追究の両方の表現として現れ、視線はどこにも定まることなく引き込まれていくようです。この作品で川田は、断片、痕跡、攪乱の美学をさらに発展させ、写真を、世界の不安定さに向き合う思考の道具と位置付けています。

1–3 Kikuji Kawada From the series *Vortex* © Kikuji Kawada, Courtesy PGI

1

2

3

川田喜久治： 本に生きる人生

展覧会の締めくくりとして、来場者は川田喜久治の出版物のセレクションを鑑賞することができます。その中には初版本も含まれ、川田本人の映像インタビューも併せて紹介されます。

写真家としての活動を始める前、川田は美術書の出版社・岩波書店で働いており、この経験が彼の写真というメディアへの向き合い方に大きく影響を与えました。川田にとって写真集は、それ自体が創造の場であり、イメージ、記憶、語りのあいだに張り詰めた緊張感が存在する場所です。彼はそれぞれの書籍を、世界の混沌を凝縮しつつも多様な共鳴を許す開かれた場として捉えています。その高い造本意識と、写真集を芸術作品として見る視点は、日本だけでなく国際的な出版シーンにも深い影響を与え、多くの写真家や出版社にとって、写真集をユニークでラディカルな作品として構想するきっかけとなりました。

1

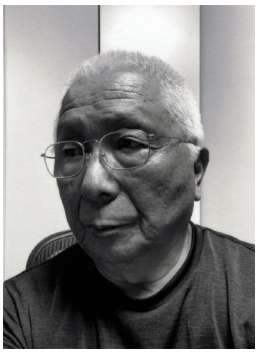
2

3

1 川田喜久治《グローブ座》
2 川田喜久治《ラスト・コスモロジー》
3 川田喜久治 《地図》

川田喜久治

1933年茨城県生まれ。1955年、立教大学経済学部を卒業し、新潮社に入社。1959年よりフリーランスとなる。佐藤明、丹野章、東松照明、奈良原一高、細江英公らと共に写真エージェンシー「VIVO」(1959-61年)を設立。
日本の敗戦という歴史の記憶を記号化する抽象とメタファーに満ちた作品集「地図/The Map」を1965年に発表し、以来現在に至るまで、常に予兆に満ちた作品を発表し続けている。自身の作品を「時代に潜むデーモンを驚きの影として写しとめることで、記憶も作家のスタイルを映す鏡になるかもしれない」と語る。近年はインスタグラムにて写真への思考を巡らせながら、日々作品をアップし続けている。



© Kikuji Kawada

VIVO

日本の写真家集団「VIVO」は1959年に川田喜久治、東松照明、細江英公、佐藤明、奈良原一高、丹野章の6人の写真家によって結成されました。戦後の時代背景の中で生まれたVIVOは、「生命力」や「動き」を想起させるその名の通り、当時主流だった社会派リアリズムを基盤としたドキュメンタリー写真からの決別を象徴しています。西洋のアバンギャルドに影響を受けながら、写真表現の刷新を志向したメンバーは、より主観的で個人的、かつ表現力豊かなスタイルを追求しました。グループとしての活動期間は1961年までと比較的短く限定的でしたが、日本写真界に大きな影響を与え、自由で実験的、そして当時の文化的・政治的に深く根ざした写真家による写真表現の基盤を築きました。また、VIVOは写真集を独立した創作の場として捉える視点を提示した点でも、決定的な役割を果たしました。

当時、私たち［VIVO］のメンバーそれぞれに構想はありましたが、未来のビジョンは必ずしも明確ではありませんでした。世界的なグラフジャーナリズムの指標であったマグナムは、私たちにとってひとつの参考になりましたが、同時に、写真家としていかに自立するかという問いに日々向き合っていました。自分たちの道を、手探りで模索していたのです。

川田喜久治(2025)

セノグラフィー

空間デザイン：小西啓睦
和紙職人：ハタノワタル

本展「Endless Map – Invisible」では、KYOTOGRAPHIE共同創設者のルシール・レイボーズと仲西祐介が、デザイナーの小西啓睦(miso)とともに手がけた、洗練された独自の展示空間が広がります。特別に設計されたものです。この展示構成は、川田喜久治の流動的な思考を映し出し、VAGUE会場全体を通じて、観客を没入感のある旅へと誘います。各シリーズは、記憶の断片であり、視覚のかけらであり、現実をめぐる静かな瞑想のように提示され、川田の作品がもつ視覚的な力を余すことなく引き出しています。

KYOTOGRAPHIEは2013年の創設以来、展覧会における空間演出(セノグラフィ)に重点を置いており、それはフェスティバルの象徴ともいえる要素となっています。本展においても、小西啓睦は日本の伝統の前衛性を感じる空間を構想しました。

展示構成には、800年以上の歴史をもつ日本の伝統的な手漉き和紙を革新的に現代空間へ応用する職人・ハタノワタルが参加。多様な質感と色彩の和紙を用いて、空間の構造をさらに豊かにしています。
入り口からすぐのアーチ天井の部屋では、〈地図〉および〈Endless Map〉からの作品が、漆黒の和紙が貼り込められた正方形の大型構造物の上に展示され、流動的かつ非線形なレイアウトで構成されています。壁面にはヴィンテージプリントが展示されます。

〈ラスト・コスモロジー〉の展示室は「眼」を想起させる空間を構成し、シリーズ全体がベンガラの赤い和紙で覆われた壁面に展開されます。〈Los Caprichos〉では、ハタノ独特の白い和紙で覆われた壮大な屏風を作品の展示壁として使っています。〈Vortex〉は今回初めて複数の映像に分けて上映し、あえて時系列が崩されています。それぞれ異なる時間軸をもつ映像を、3つの洞穴空間に分けて展示します。

Model of scenography design by Hiromitsu Konishi

KYOTOGRAPHIE：
12周年記念本 『KYOTOGRAPHIE：京都物語 ｜十二支』

KYOTOGRAPHIE京都国際写真祭の12周年を記念し、フェスティバルの歩みを振り返る新刊書籍が、川田喜久治展「Endless Map – Invisible」の会場VAGUEにて販売されます。

12周年記念本『KYOTOGRAPHIE：京都物語 ｜十二支』は、日英バイリンガルで編まれた一冊であり、コミュニティとの関わりや協働、場所への繊細なまなざしによって育まれてきたフェスティバルの本質を描き出しています。

共同創設者であるルシール・レイボーズと仲西祐介の語りを軸に、フェスティバル誕生の経緯から成長の過程までを紹介。新たに書き下ろされたエッセイや対談、アーカイブ資料を通して、その背後にある人々や思想、文化的背景をひもときます。フランソワ・エベル、片岡真実、オマール・ヴィクター・ディオプら、国内外のアーティストやキュレーター、文化関係者による寄稿も収録。
セノグラフィーや文化横断性、創造的実践に関する論考を通して、KYOTOGRAPHIEがほかに類を見ない存在となった背景を多角的に捉えています。

本書は単なる回顧録ではなく、多くの人々の手によって形づくられてきたこのフェスティバルの歩みと、そこで育まれたつながりを見つめ直す「生きた記録」です。ひとつの大胆な発想から始まり、写真と視覚表現の国際的な舞台へと発展してきたKYOTOGRAPHIEの物語は、想像力と共有された志によって紡がれてきました。川田喜久治の展覧会とともにアルルで紹介されるこの書籍は、国境を越えて現代の視覚文化を形づくる、独立した芸術祭の役割について改めて問いかけます。

https://www.kyotographie.jp/publications/a-kyoto-story/

SIGMA AIZU JAPAN |
時を超える撮影道具を目指して

会場では、SIGMAのものづくりを支える理念を象徴的に表現した、シンプルながら印象的な展示が行われます。最新のミラーレスカメラ「SIGMA BF」を中心に、福島県・会津にある唯一の生産拠点で育まれてきた職人技と、写真芸術への深い敬意を軸とした持続的な哲学が映し出されています。この揺るぎない姿勢は、KYOTOGRAPHIEとの協働、そして写真家・川田喜久治の作品への支援にもつながっています。本展覧会を通して、来場者の皆さまには、SIGMAのものづくりと、写真芸術とのあいだに通じる価値観や美意識を体感していただけます。

https://www.sigma-global.com/cameras/bf/

SIGMA
AIZU
JAPAN

KYOTOGRAPHIE京都国際写真祭

KYOTOGRAPHIEは、京都を拠点に開催される国際写真祭です。京都は日本における文化と芸術の中心地として、世界的にも注目されています。毎年春に開催されるこのフェスティバルは、単なる展示にとどまらず、伝統と現代の表現が交わる独自の体験を提供します。多様な価値観が出会う場として、新たな対話を生み出し、訪れる人々に京都という街の新しい見方を提案しています。
KYOTOGRAPHIEは既成の枠にとらわれない斬新な空間演出や、深く考えられた展示構成で知られています。フェスティバルが生み出す体験は、従来の形式を超えて、作品だけでなくその空間の見え方や感じ方にも新しい視点をもたらします。こうした多面的な体験は、京都だからこそ実現できるものです。
また、KYOTOGRAPHIEは、人々をつなぎ、違いを受け入れ、ジャンルの垣根を越えた出会いの場を作り出します。予想もしない出会いや発見が生まれる場所として、築き、壊し、再構築し、つなぎ直す——常に進化し続けるフェスティバルです。
KYOTOGRAPHIEの中心にあるのはメインプログラムです。毎年、共同ディレクターのルシール・レイボーズと仲西祐介が独自のテーマを掲げ、そのテーマに沿ってプログラムが企画され、アーティストが招待されます。京都市内のさまざまな会場が、KYOTOGRAPHIEのチーム、参加アーティスト、会場パートナー、デザイナーとの綿密な連携により、特別な展示空間へと変貌を遂げます。

www.kyotographie.jp/

SIGMA

MADE IN AIZU, JAPAN
時を超える撮影道具を目指して

Sigmaは、カメラ、レンズ、アクセサリーの製造販売を行う日本の光学機器メーカーです。
1961年の創業以来、人々が持つ表現への情熱に対する深い敬意を常に忘れず、あらゆるニーズに応える最高の撮影道具の提供を目指してきました。
Sigma唯一の生産拠点である会津工場、そして東北地方を中心としたサプライチェーンによって実現する「Made in Aizu, Japan」の高い品質と、地域に根差した知恵と技術の結晶は、Sigmaの本質そのものです。

“The Art of engineering. Engineering for Art.”
芸術の域まで技術を高め、技術を芸術に尽くす

芸術に対する深い敬意はSigmaの原動力であり、自らの技術を芸術の域まで高めることで、表現する人々の情熱に応えてきました。常に革新を目指し、新たな表現の可能性を追求する姿勢は、どんなときも変わることはありません。
その上でSigmaは、写真映像文化・芸術の発展に寄与することも企業の使命として位置付けています。写真・映像文化活動への協賛、写真集蔵書の収集と保管・公開に加え、このような協働プロジェクトなど、新たな活動をより広く、深く展開しています。
www.sigma-global.com/

アルル国際写真祭

1970年に写真家ルシアン・クレルグらによって創設された「アルル国際写真（Les Rencontres de la photographie d’Arles）」は、世界で最も歴史があり、最大規模を誇る写真祭です。今年で第56回を迎え、KYOTOGRAPHIEにも大きな影響を与えたことで知られています。
ローマ時代の遺構を活用した複雑かつ重層的な展示を特色とし、世界中の写真家、キュレーター、ジャーナリスト、写真ファンが集う、国際的な交流と発見の場となっています。
「アルル・アソシエ（Arles Associé）」は、このフェスティバルの公式プログラムのひとつで、アルルに根ざしながらも、多様な表現の可能性に開かれた連携企画として展開されています。

https://www.rencontres-arles.com/en

Vague

Vagueは、日本と世界をつなぐ創造のハブです。フランス語で「波」を意味するその名のとおり、VagueはTeruhiro Yanagihara Studioのデザイン哲学を空間として具現化する場であり、創造性のあわいにある実験的なアイデアの実験室として機能しています。
拠点は二か所あり、ひとつは、山と海に挟まれた港町・神戸にある1930年代築の元銀行を改装した広々とした空間。もうひとつは、南フランスの古都アルルの静かな通りに佇む、自然光が差し込む石造りの建物です。

Transcendence exhibition
at Vague, Arles Associe 2024
© Kousuke Arakawa, KYOTOGRAPHIE

プレス連絡先

KYOTOGRAPHIE プレス
小泉智子
tomoko.koizumi@kyotographie.jp
press@kyotographie.jp

KYOTOGRAPHIE京都国際写真祭
京都市中京区久遠院前町672番地1
〒604-0993
Tel. +81 (0) 75 708 7108
www.kyotographie.jp